



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1933, 20(6): 475-477

ISSUE DATE:

1933-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184229>

RIGHT:

○朝鮮米の日本化

朝鮮には在來の水稲が五一三種もあつたが元來内地種と同一族である。東洋には水稲幾千種あるが之を秬と秼に二大別する。さうして兩者の間に交配種をつくと雜種は著しく不稔性を帶び實を結ばなくなる。そこで支那種の多くと内地種を交配すると不稔性が現はれる、それは支那に秼が多いからであるが、内地種と朝鮮種は共に秬であるから、内鮮交配の結果決して不稔性にならない、臺灣の在來種と内地種と交配すれば不稔性になる。この事は我豐萊原の瑞穂はもともと朝鮮と同一系統であつて、支那の南方種でないことをつげる一體である。閑話休題、朝鮮の在來種はかやうに日本系であるが殆ど全部長芒を有し、稈長く倒伏し易いこと恰も東北地方の在來種に見られる處で、我國には古代から同様であつたが、近い頃に無芒種が盛んになつたが北國は概して長芒で色がついてゐるので、これは朝鮮とひとしい、その長芒は早冷の年に佳作をしめし、食味もよいが倒伏し易く病害に弱い、多肥多收に不適である。昔は肥料も少く、生産も多大を望まないために積極的生産力の増進を顧みなかつたから、それで事足つたが、やがて内地では人口も増加し收約の農法をとつたために米のみでない、大麥でも小麥でも現今の日本のものは短稈多蘖よく肥料に堪へ、然も成熟

期の早い多收性の品種に富むこと、世界に誇るべきものあるに至つたのである。そこで内地の無芒種が朝鮮に移植され約二十年をへた今日朝鮮米の品質は古今一變してしまつた。大正年代までは品種の更新統一期で在來の朝鮮種を、少數の内地優良種にかへたが(大粒時代、少肥時代)、産米増殖計畫の實施に入つた昭和年代になつて金肥の使用は著しく増進し、大豆粕から硫酸にかはり從來の品種よりも抵抗力の強い増收力のある小粒種が有利とせらるゝ時代がきた。しかし一般からみて朝鮮は水利不安の田が多く、施肥も十分でないから反當取高も少い故に古い品質本位の米が作くられ、二十年前に移された穀良郡とか多摩錦が今日も大に幅をきかしてゐる。

しかしこれらは内地では殆ど忘れられた品種である。大粒形の品種は概して長稈で莖少く種が重く多肥栽培に不向であるが、それが當時の朝鮮に適してゐたが、水利組合の蒙利地區の如く出來る限り増收を要し、肥料も許す限り多くし、收約的に耕作する所では倒伏せず稻熱病にかゝり難い品種を要求し大粒の穀良郡や神力は不向となり。最近數年銀坊主又は陸羽一三二號の如きものが急につくられるやうになつた。多摩錦は食味よく、病害・旱害・鹽害に強く、有芒で收量は少いけれども朝鮮内部の田に適するから尙盛につくられる。稻程氣候に従ふものはない、朝鮮では氣候的に五帶の水稲地區が出來てゐる。

一、最早生種地帯は、極北の稻作で栽培面積一萬町步成南成

北の高地帯、内地北海道の早中種が適當し赤毛・坊主がつくられる、但し咸北平野では北海道の晩種小田代の如きをつくる。

二、早生種地帯、西北鮮地方と江原道の中部高地、九月平均氣温等温線十度から十四度の線で限られるが、栽培面積三十萬町歩、平北から咸南・江原にわたたり、㊦及㊧米として産出され、内地の青森・秋田邊の品種がつくられる。平安南・北及江原の山地からは在來の老人稻・綠豆租などがつくられる。

三、は中生種地帯で九月平均最低氣温一六度の等温線で限られる中部の土地で黃海南部から京畿・江原・忠北・忠南の一部に及び栽培面積五十萬町歩・穀良都・多摩錦・銀坊主・錦の如き優良種をつくり㊨米として移出される。

四、晩生種地帯は九月平均最低氣温等温線十六度から十九度まで忠南・全北・全南・慶北・慶南・江原東岸、即南鮮であつて四十六萬町に達し前者と同じ穀良都・多摩錦・早神力・中生銀坊主がつくられる。㊩及㊪米の生産地である。

五、は最晩生種地帯で全南及慶南の海岸地、雄町・辨慶・中熟神力等の産地、栽培面積二十萬町歩に達する。

かやうにして朝鮮米は第二帶に於て山間に優良な在來種を残す外に、今日では全部日本化してしまつた。在來種の施肥を少くして、たとへ莖數が少くとも、味さへよければよいといふやうな贅澤な米は朝鮮にも無くなつた。これは獨り朝鮮の

みでなく内地も同様であるが、さうした多量生産・増收多肥の時代が來たことは、食道樂の目からは悲むべき現象であるけれども致方はない。かくて鮮米移出平均六百九十萬石といふものが、内地の人口増加に對する補給米とするに至つた、さうして朝鮮米の生産といふことを外にして、日本人の食料問題の解決はつきかねるといふ時代が出現するに至つたのである。

○北鮮普天堡農事試驗場の報告

朝鮮の北端鴨綠江

の上流咸鏡南道甲山郡、江水と佳林川との會流地に近く普天堡といふ村がある。そこで農事試驗をやつて北鮮高原地域に適する農作物の實驗をやつてゐる小野寺氏の報告によると、北鮮の高地ことに白頭山附近は、土地肥沃であるが、海拔一千米以上で、平地帯とちがひ夏は冷涼（二十四度—十二・三度）各は寒氣がきびしく〇下三十五・六度雪が積らない場合には土地が凍つて植物が枯れてしまふ程の、北方に位し一年中濕氣が少く、北米のカナダ・合衆國の北部山岳地方、歐洲で英佛の北部・白・利・獨・波・ロシヤ西北部の氣候に相當する、故に日本國內で生産の出來ないで、外國から輸入しなくてはならぬ様な農産原料品を生産する見込が多い。古く國境帶無人の地であつたから、土地の生産力は強く、無肥でもよく出來、燕麥なら三石、馬鈴薯なら四〇〇貫位とれるといふ。今後有望な作物は第一に亞麻で、今日北海道で大面積に作られて

ゐるが、北歐・シベリヤの特産で近來軍需品として重要になつてきた、飛行機の翼布になる。我國は年々五六百萬圓輸入してゐる。これがよく出来るので、本年から帝國製麻會社が經營をはじめ茂山・甲山二郡内で企業をはじめた。成績良好

普天堡附近農家の百十戸平均が四〇〇斤を越えた。第二に甜菜がある、こゝではクラインワンツレーベン種を作り出來榮がよい。開墾二年日反當收量平均二五〇〇斤、含糖量一八%

で糖量四五〇斤に達した。但し製糖會社がまだ出來てゐないのが残念である。將來は有望である。第三小麥、優等小麥粉はカナダ産のバートレッドが入つてゐる、之は粉のリキを強くするもので、パン製造にはこれが必要なのだが硝子質粒が多いのを特色とする。所が北鮮の小麥は、カナダ産の一等一

頭の中に七五%以上の硝子質粒をもつのに比して、普天堡の産は九四・二%といふ、絶對優良品が出來た、もしこの地で小麥の品種を吟味したら、年々日本への輸入六百萬石の小麥の一部分を驅逐しうることゝ信じる。さうして小麥をつくると、

反當一石五斗、收入二十四圓七十五錢、肥料代十二圓を引いて利益約十二、三圓となるが、燕麥や大麥をつくれれば、肥料が入らぬかはりに收入五圓乃至六圓(反當り二石乃至三石)にしかならない。第四にホップこれも獨逸から輸入七、八十萬圓

であるが、反當約七貫に達し、ドイツ以上の成績をしめすからこれもこの地方でつくるべきである。第五にインゲン豆、從來唐豆といつてゐたもの、北海道十勝で全耕地の八割に達

する程に作つてゐるが、これも成績はよい。料理用及菓子用になる。在來種を試験中であるが、いづれ面白い結果がでることゝ期待されてゐる。

何れにしても日本の内地とは土質氣候等全く異類の土地であるから其產出物の増加は、内地の生産統制に影響を及ぼさない、大にこの種の研究の發達せんことは望ましい。

○ブラジル珈琲の輸出減退

一九三二年の世界珈琲

消費高は二三、貳二〇、〇〇〇俵で前年の二五、二二、〇〇〇俵に比して約二百萬俵の消費減退である。之を一九三一年に比して更に八%の減少をしめす。これは世界不況の深刻化に依り各國人間に珈琲飲用上節約を來した爲であるが、その結果ブラジル珈琲生産者は最も打撃をうけた。即一九三一年伯國輸出量一六、九五一、〇〇〇俵は他生産國の輸出量二六一、〇〇〇俵に對し、六七・八%を示したが一九三二年の伯國輸出量は一躍一三、九九一、〇〇〇俵に減退し他國輸出量は却て二二九、〇〇〇俵に上り、伯國輸出比率は六〇・二%に低下した。従つて伯國は一九三一年に比し三百萬俵の供給減を喫したのである。之に反して他國は百萬俵以上を輸出増加したのである。一寸の間油斷をすれば、直ちにその結果が著るゝといふ迄に注意すべき國際經濟機構があることを思ふと、常に世界一の生産を夢みるといふことは、容易な事ではないらしい。